

小杉 泰・林佳世子編

『イスラーム 書物の歴史』

名古屋大学出版会 二〇一四・六刊
A5 四七二頁 五五〇〇円

本書は、題名に「イスラーム」と冠するが狭義の宗教としてのイスラームに関する本の歴史ではなく、獣皮紙を含む紙を記録に利用する時代から現代までを対象とし、イスラーム圏の写本を含む書物の歴史を取り扱ったものである。紙幅の制限上すべてをとりあげることにはできないが、簡単に内容を紹介する。

第Ⅰ部は六章からなり、イスラーム文明のはじまりと書物文化の隆盛、アラビア語の正書法やアラビア文字文化圏の写本文化について扱う。第一章（小杉泰）、第四章（小杉麻李亜）は、イスラームの誕生とアラビア語の最初の本であるクルアーンの成立とその写本の正典化と書籍化を考察している。クルアーンは最初は「朗誦されるもの」として口承で伝えられ、後にムハンマドの弟子によって文字化され書籍化された。そのため、さまざまな偽写本が広まらないように正典化が行われた過程が示される。第二章、第五章（清水和裕）は、アッバース朝時代に中央アジアから伝わった「紙の技術」とそれに伴う異教徒文化の学問体系導入の関係を述べ、紙と写本の制作販売を同時に担う書籍市場の実態と、バグダードのワツラーク（紙屋）であるイブン・ナディームによる当時流通していた書物を解説した『目録』を通じたアッバース朝域

内の写本文化について論じる。

第Ⅱ部は十章からなり、イラン、トルコ、インドなどの地域で華ひらいた写本文化事情を扱う。第一章（後藤裕加子）ではティムール朝時代の写本制作と製本技術等の写本の物理的な要素が紹介され、第二章（竹田敏之）は写本に書かれた文字（書道）の部分に話題が移り、第三章以降は写本の多岐にわたる内容や、歴史家・神秘家などの写本制作の従事者、地域性・時代性が考察される。第三章（ヤマンラール水野美奈子）は、イスラーム圏では偶像崇拜禁止のため生物描写は回避されると言われてきたが、実はイスラーム独自の豊かな写本装飾絵画が発展したことを明らかにする。第四章（山本啓二）は八世紀から十五世紀の自然科学分野写本のアラビア語・ギリシア語・ラテン語相互の翻訳活動を論じる。

第Ⅲ部は六章からなり、写本・印刷本・デジタル書籍を扱う。第四章（林佳世子）は強い写本文化の伝統が根づいているイスラーム圏において近代的な印刷がいかに導入され定着していったかを考察する。第五章（小杉麻李亜）、第六章（小杉泰）ではクルアーン刊本とそのデジタル化、デジタル時代の到来におけるイスラーム諸学古典の復興を検討する。また世界の写本所蔵の状況、図書館の動向分析や、アラブ、トルコ研究者の写本研究にまつわるフィールド体験の楽しさがとりあげられており面白く読ませる。

書物の歴史というとグーテンベルクの印刷機から活版印刷への過程が想起されるが、近代以前から書物文化の最先端を行っていたイスラーム圏に光をあてた本書の意義は大きい。イスラーム圏においては、実は八世紀末から書籍市場が繁栄し、客の注文に応

じて写本を制作する、今のオンデマンド出版に類似したことが行われていた。この方法は多種少量出版に好都合であり、量産のための機械印刷は不向きであったのだ。多少地域的にアラブ、トルコに偏重している感があるが、多彩なアプローチで書物の制作・流通の歴史を提示する。本書は書物の歴史とともに、イスラーム圏の学問的伝統を知ることができる一挙両得のお薦めの書である。

(後藤敦子)